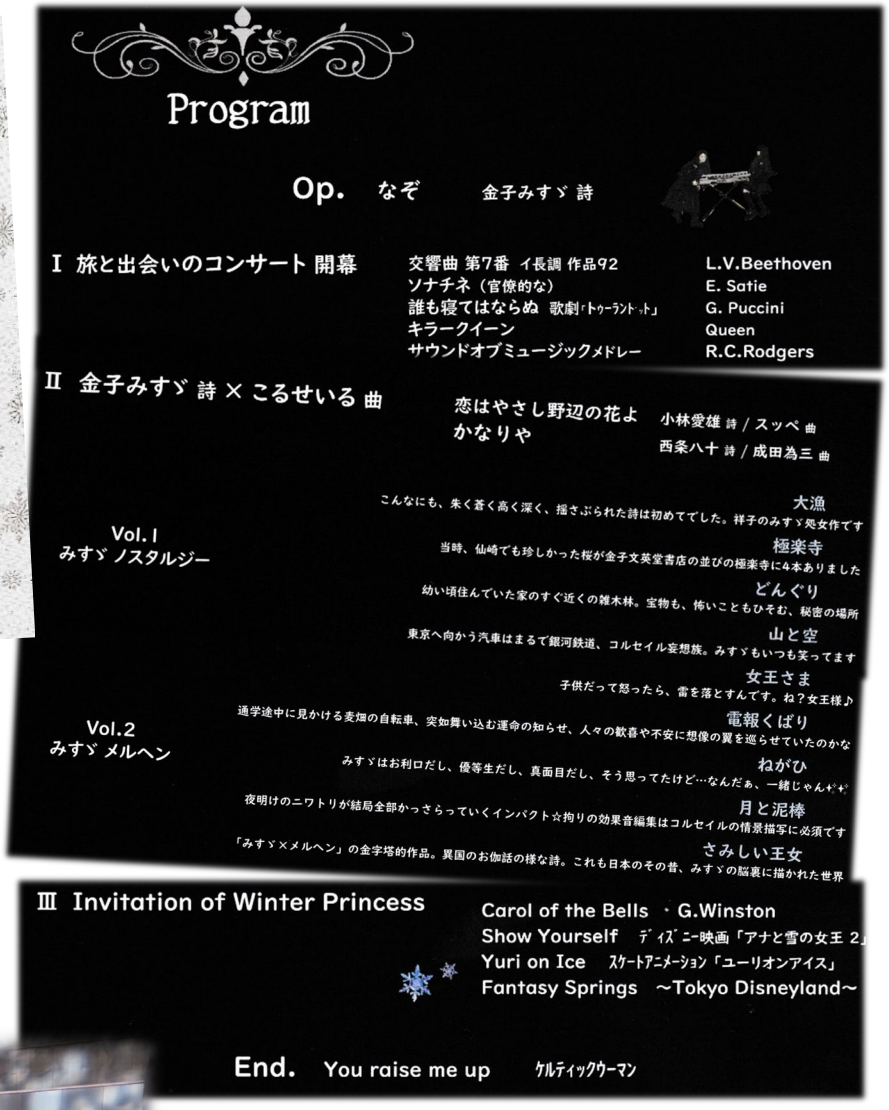
2024年11月8日、彩の国さいたま藝術劇場小ホールで「**コルセイルと冬の王女**」と題するユニークなコンサートを鑑賞しました。このホールはすり鉢状の客席を持つオープンステージで、演劇、ダンス、音楽などの多彩な舞台表現が可能で、創造力を大いに刺激してくれる、今回のステージには打ってつけのスペースです。

「**コルセイルと冬の王女**」は、**コルセイル**（佳枝 *yoshie*・祥子 *showko*）のデュオが「コルセイル×みすゞ×メルヘン」を元にして、イメージをつぎつぎと膨らませた幻想の世界です。二台のシンセサイザー、二人のヴォーカルが紡ぎ出す音の空間に、映像と照明が効果的に重なって聴衆を異世界へと導いていきます。



オープニングは、ベートーヴェンの「交響曲第7番」のアレンジで幕を開け、エリック・サティーの「ソナチネ」、プッチーニの「誰も寝てはならぬ」とクラシックを並べ、ついでクイーンの「キラークイーン」、ミュージカル「サウンドオブミュージックメドレー」とバラエティに富んだプログラムでした。

つづく第2ステージが、コルセイルがもっとも力を注いだメインのステージ。Vol.1＜みすゞノスタルジー＞は、「大漁」、「極楽寺」、「どんぐり」、「山と空」、Vo.2＜みすずメルヘン＞では、「女王さま」、

「電報くばり」、「ねがひ」、「月と泥棒」、「さみしい王女」と9曲すべてコルセイルが作曲しています。
このステージに彼女たちの思いが込められていました。歌詞が大きなスクリーンに映し出され、映像と音響と澄み切った歌声で聴く者をどんどん引き込んでいきました。みごとな演出でした。

第3ステージは、“Invitation of Winter Princess”と題する冬にスポットをあてたオムニバス、“Carol of the Bells”(G.Winston)、“Yuri on Ice”(スケートアニメーション)、“FantasySprings”(Disneysea)、スケール感のある楽しい音空間となりました。

最後は、アイルランド出身の女声ヴォーカルグループ Celtic Woman(ケルティック・ウーマン)の人気曲で、多くのアーティストがカバーしている“You raise me up”で締めくくりました。この曲は、2006年2月、トリノオリンピックのフィギュアスケートで金メダルを受賞した荒川静香が、エキシビションで使用し、日本でケルティック・ウーマンが知られるきっかけとなった曲です。

コルセイルにとって、あらたに見つけた金子みすゞの世界、みすゞメルヘンをどうやって聴衆に届けるか、その前に演奏者自らが楽しめなくては意味がない。そうして、たくさんの試行錯誤を重ねながら、迎えた本番、始まってみれば、瞬く間にフィナーレを迎えることとなりました。

コルセイルの夢はますます広がるばかりのようです。これからどのような音楽世界を紡ぎ出してくれるのか、おおいに期待しています。

童謡詩人・金子みすゞ

『赤い鳥』、『金の船』、『童話』などの童話童謡雑誌が次々と創刊された大正時代末期、彗星のごとく現れ、ひときわ光を放っていたのが童謡詩人・金子みすゞといわれています。金子みすゞ（本名テル）は、明治36年（1903）、現在の山口県長門市仙崎に生まれ、学業成績は優秀、おとなしく、読書好きでだれにでも優しい人であったといいます。

童謡を書き始めたのは、20歳の頃からですが、作品を投稿した4つの雑誌すべてに掲載されるという驚異的なデビューをしました。『童話』の選者であった西條八十に「若き童謡詩人の中の巨星」と賞賛されるなど、高く評価されました。しかし、その短い生涯はけっして明るいものではなく、23歳で結婚したものの、文学を理解しない夫から詩作を禁じられ、さらには病気を抱え込み、果ては離婚と苦しみの連続でした。最期は、前夫から娘を奪われないために自ら死を選び、26歳の若さでこの世を去ってしまいました。

金子みすゞの残した作品は散逸してしまい、いつしか幻の童謡詩人と語り継がれるばかりとなってしまいましたが、昭和59（1984）年、児童文学作家の矢崎節夫氏（金子みすゞ記念館館長）の情熱により、512篇にもおよぶ遺稿集が発掘されました。詩集は出版され、深くどこまでも優しい世界観は、日本のみならず今や世界14ヶ国語に翻訳され、広く知られることとなりました。代表作は「私と小鳥と鈴と」「大漁」などです。

金子みすゞ 「不思議」
全日本合唱コンクール課題曲に

2025年度全日本合唱コンクール高校、大学職場一般部門課題曲のうち、[混声]部門に金子みすゞの詩「不思議」（『不思議』から）が選ばれています。作曲は石若雅弥氏。

加藤良一　2024年11月29日

Back
音楽・合唱コーナーTOPへ

Home
HOME PAGEへ